

アイヌ文化についてまず知らなければならぬことは、その独特の世界観です。この「世界観」とは自分自身と自らが生きている生活環境にある全ての存在をア

アイヌの世界観



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モンレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

イヌの人々がどのように捉えているかという意味です。全ての存在には、火、太陽、風、雨、雷のような自然現象や自然、動植物や人間が作った物体まであらゆるものが含まれます。そして、人間が到底たちうちできない自然現象や山や川などの自然そのものは力のあるカムイ（神）として崇敬します。熊、狼、フクロウ、鷲などの強い動物もやはり重要なカムイとされます。では、人間の作った弓矢や鍋や窯、器などはどうでしょう。これらもやはり人間の役に立つものなので、広義ではカムイに含まれます。これら多種多様なカムイの区別は、位が高いか低いかではなく、役割の相違だとのこと。

日本では古来から、自然はもとより、モノにも魂があると看做してきたので、このようなアイヌの考え方あまり違和感はないのではないのでしょうか。アイヌの人達は使用できなくなったお椀や皿と別れることになる場合も、簡単な魂送りの儀式をして、役立ってくれたことに感謝するといいます。縄文時代の貝塚もこのような送りの場であったという説が有力です。一方日本では、現在でも針供養、包丁供養、人形供養などが各地で行われ、最近ではロボット犬アイボ、携帯電話、メガネまでもが供養の対象となっているようです。アイヌの送りの儀式と日本のモノ供養は非常に似ています。ふと思うのは、今や世界共通語になりつつある日本の「もったいない」という文化には、モノであっても魂のあるものであるから粗末に扱ってはならない、ゴミとしてポイと捨てることのできないという感覚が潜んでいるような気がします。

では、アイヌは様々な生き物やモノの魂をどこに「送る」のでしょうか。アイヌの世界はこの世と「あの世」で成り立っており、送られた魂は「あの世」に

帰ります。そして、肉体や形をもって再びこの世、つまり現世に戻るという循環を繰り返していると考えられます。

人間の場合、死んでからこの世に再び生まれてくるまでの時間が長いのか短いかは生前の行いによって決まります。仏教にも輪廻転生という考え方があり、生前の行いが悪いと人間以外の昆虫や獣に生まれ変わるといわれますが、アイヌの世界では、種類は同じ人間、男女の別も同じまだそうです。この原則は動植物全てに適用されます。

道東に、同じ熊が生まれ変わって現れたと信じられている話が伝えられています。ある人が山で熊に襲われ、持っていたナタで反撃し、熊の額に傷を負わせて被害を免れたことがありました。その後、この熊は「改心」して現れ、猟師に討ち取られましたが、後年授かった熊の額に同じ傷跡があったそうです（アイヌは、熊を獲るとか殺すとか言わず、「授かる」と表現します。また、熊猟の際もカムイを「お迎えに」行く、と言います）。このことからアイヌの人々の間では、最初に額に傷を負った熊がこの世に蘇り、再び自らを「授けた」と考えました。「授けられた」熊は腑分けした後、頭蓋に頭皮をつけたまま屋内に客人として迎えられます。その状況を意味するオ（そこ（頭）に）ルシ（毛皮）クル（を含んだ）マラット（客人）というアイヌ語にも、動物である熊を偉い神（キムン・カムイ：山の・神）として見、客人として歓迎するというアイヌの人々の考え方がよく現れています。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長

アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療（整体ほか）等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査（北海道教育委員会）に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部（滝川市）で開催のペカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』（北海道教育委員会、2007、2008年）、『平成20～29年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1～9』（北海道教育委員会、2008～2017年）等。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。